

資料翻訳

仙台藩校養賢堂蔵版『訂正五経』凡例訳注稿

高野淳一

一 はじめに

一関市本寺地区は、世界遺産登録を目指す平泉の中核をなす地域として近年注目を集めている。この本寺地区の村役人を代々つとめてきた佐藤家に伝わる文書は、「佐藤家文書」と呼ばれ、現在二〇〇点余りが一関市立博物館に所蔵されている。江戸中期から明治初期にかけての、農村資料を中心とした極めて多種多様な文献を収めるこの文書については、既に一関博物館編『骨寺村莊園遺跡確認調査報告書』（一関市教育委員会発行、二〇〇五年三月）が目録一覧を作り、一部文書の読解を行っている。

平成十八年八月から九月にかけて数度にわたり、一関市立博物館のご厚意により、当該文書を閲覧し、写真撮影をさせていただいた。ここではその中から、これまで余り注目されていない仙台藩校・養賢堂蔵版『訂正五経』を取り上げ、その凡例に訳注を施し、その性格の一端を考察することを試みる。

「佐藤家文書」所収の『訂正五経』は、もとは易・書・詩・礼・春秋の五つの經典が一セットとして出版されたものと思われる。『礼記』末尾の奥付に、「書林 仙臺国分町 菅原屋安兵衛」とあることから、同書林が頒行所に指定された文化九（一八一二）年以降の刊行であろう。これがどういった経緯で佐藤家に伝わったか不明なのだが、幕末から明治にかけての時期には五つの經典それぞれが別々の持主の手許に有ったらしいことが、附された帖紙の書込みから窺える。これらの書物を、一体どのような人々がどういった目的で所有し、またどのように読み利用していたか。

研究の目指すところは、解題を含んだより詳細な「佐藤家文書」の目録を作

成すると共に、当該文書から窺える本寺地区及びその周辺の「知」や教養の集積、拡がりを明らかにすることにある。本稿は、その前提となる基礎的な作業と位置づけられるものである。

『訂正五経』凡例は、全部で七つの段落から成る。そこでここでもその段落分けに沿い、それぞれ本文を掲げた上で翻訳・注釈を施す。なお、注釈の中で取り上げたさまざまな書物と著者の解説は、特に断らない限り『四庫全書総目』（中華書局影印本、一九六五年）及び『歷代人物年碑伝綜表』（姜亮夫纂定・陶秋英校、中華書局香港分局、一九七六年）に拠った。

二 訳 注

【本文——総論】

一 六経、聖人明道設教、萬世不刊之大典也。至秦焚書、而樂經遂亡。故有五經之名、而其所以次序者不同。禮記經解、以詩為首、與莊子同。七略藝文志、以易居前。今據陸德明、以著述早晚、經義揀別、以成次第。以周易為首、尚書次之、毛詩次之、禮記次之、春秋次之。

【翻訳】六経とは、聖人が正しい道を明らかにして教えを設けたもので、万世にわたって滅びることのない大いなる模範である。秦がさまざまな書物を焼き尽くした時に、『楽経』は滅んでしまった①。だから「五経」と呼ばれるのだが、その順序次第の立て方は一様でない。『礼記』『経解篇』では、詩を第一としており②、その順序の立て方は『莊子』と同じである③。『七略』及びそれを承けた『漢書』『芸文志』では、『周易』を最初に置い

ている(4)。ここでは陸徳明の『經典釈文』に拠り、著述の早い晩い、また内容の総論別論によつて、順序次第を構成する。『周易』を初めとし、次に『尚書』、次に『毛詩』、次に『礼記』、次に『春秋』という具合である(5)。

〔訳注〕

(1) 秦の焚書については、『史記』秦始皇本紀、始皇三十四年の条に、丞相である李斯の上奏文を以下のように載せる。『古者天下散乱、莫之能一。是以諸侯並作、語皆道古以害今、飾虛言以亂實、人善其私学、以非上知所建立。今皇帝并有天下、別黑白而定一尊、私学而相与非法教。人聞令下、則各以其学議之、入則心非、出則巷議、夸主以為名、異主以為高、率群下以作謗。如此弗禁、則主勢降乎上、党与成乎下。禁之便。臣請、史官非秦記、皆燒之。非博士官所職天下敢有藏詩書百家語者、悉詣守尉雜燒之。有敢偶語詩書者、棄市。以古非今者族。吏見知不举者与同罪。令下三十日不燒、黥為城旦。所不去者、醫藥・卜筮・種樹之書。若欲有学法令、以吏為師。』同じく『史記』儒林伝には、『及至秦之季世、焚詩書、坑術士。六芸從此缺焉。』とある。また時代が下るが、清・皮錫瑞(一八五〇～一九〇八)『經学歴史』二、「經学流伝時代」に、「孔子所定、謂之經。弟子所积、謂之伝、或謂之記。弟子展転相授、謂之說。惟詩・書・礼・樂・易・春秋六芸、乃孔子所手定、得稱為經。…漢人以樂經亡、但立詩・書・易・礼・春秋五經博士、後增論語為六、又增孝經為七。唐分三礼・三伝、合易・書・詩為九。宋又增論語・孝經・孟子・爾雅為十三經。皆不知經伝当分別、不得以伝記概稱為經也。」とある。

(2) 『礼記』經解篇「孔子曰、入其国、其教可知也。其為人也、溫柔敦厚、詩教也。疏通知遠、書教也。広博易良、樂教也。絮静精微、易教也。恭儉莊敬、礼教也。属辭比事、春秋教也。」

(3) 『莊子』天下篇「其在於詩・書・礼・樂者、鄒魯之士、搢紳先生、多能明之。詩以道志、書以道事、礼以道行、樂以道和、易以道陰陽、春秋以道名分。其数散於天下而設於中国者、百家之学、時或稱而道之。」

(4) 『漢書』芸文志「至成帝(前三三～前二七)時、以書頗散亡、使謁者陳農求遺書於天下。詔光祿大夫劉向校經伝諸子詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校数術、侍医李柱国校方伎。每一書已、向輒條其篇目、撮其指意、録而奏之。会向卒、哀帝(前七～前一)復使向子侍中奉車都尉歆卒父業。

歆於是總群書而奏其七略、故有輯略、有六芸略、有諸子略、有詩賦略、有兵書略、有術数略、有方伎略。今刪其要、以備篇籍。」同「六芸之文、樂以和神、仁之表也。詩以正言、義之用也。礼以明体、明者著見、故無訓也。書以広聴、知之術也。春秋以断事、信之符也。五者蓋五常之道、相須而備、而易為之原。」

(5) 陸徳明(五五六～六二七)『經典釈文』序録「五經六籍、聖人設教、訓誘機要、寧有短長。然時有澆淳、随疾投藥、不相沿襲、豈無後先。所以次第互有不同。如礼記經解之說、以詩為首。七略芸文所記、周易居前。阮孝緒七録、亦同此。而王儉七志、孝經為初。原其後前、義有各旨。今欲以著述早晚、經義摠別、以成次第、出之如左。／周易／雖文起周代、而卦肇伏羲、既処名教之初、故易為七經之首。／古文尚書／既起五帝之末、理後三皇之經、故次於易。／毛詩／既起周文、又兼商頌、故在堯舜之後、次於易書。／三礼／周儀二礼、並周公所制、宣次文王。礼記雖有戴聖所録、然忘名已久、又記二礼闕遺、甚多相從、次於詩下。三礼次第、周為本、儀為末、先後可見、然古有樂經、謂之六經。滅亡既久、今亦闕焉。／春秋／既是孔子所作、理当後於周公、故次於礼。左丘明受經於仲尼、公羊高受之於子夏、穀梁赤乃後代伝聞、三代次第自顯。」

〔本文二一周易〕

一 周易訓點、從朱子本義。元鄱陽董真卿周易會通、載文公之孫朱鑑跋呂氏音義云、先公著述經傳、悉加音訓、而於易獨舍者、以有東萊先生此書也。由是觀之、朱子本義、無釋音。鑑、文公長子塾之子、此必所親見聞也。音訓、則東萊門人金華王莘叟所筆受也。其書集陸氏及諸家音義。真卿得其善本、悉附經文間。見會通、明永樂大全音、從宋天台董楷例、參考呂氏音訓者也。董氏音、與陸氏釋文同、今本大全、反切多誤字。因今以釋文及董氏音正之。古註及程傳音讀、不同本義者、專以本義為正。

〔翻訳〕『周易』の訓點は、朱子『周易本義』に従う。元・鄱陽の董真卿『周易會通』に、朱子の孫である朱鑑の「跋呂氏音義」を載せ、次のように言っている。「先公・朱子の著述した經典の注釈では、全て発音意味の解釈を附けているのだが、『周易』だけに無いのは、呂東萊(祖謙)先生に既にこの著述があつたからである。」このことから見ると、朱子『周易本義』では、

発音を解釈していない。朱鑑は、朱子の長子・朱塾の子であるから、これは直接見聞したことに違いない。呂氏の解釈した発音意味は、かれの門人である金華の王莘叟が筆受したものである⁽¹⁾。その書は、陸徳明及び諸家の解釈した発音意味を集めている。董真卿がその善本を手に入れ、全て経文の間に附載している⁽²⁾。この『周易会通』を見てみると、明・永楽帝『周易大全』が宋・天台の董楷の例に従い、呂氏の解釈した発音意味を参考にしていることがわかる⁽³⁾。董真卿の発音は、陸氏『經典釈文』と同じなのだが、現存の『周易大全』は、反切に誤りが多い。そこで今、『經典釈文』及び董真卿『周易会通』記載の発音を用いて改める。古い注釈と程頤（伊川）『易伝』の発音のうち、『周易本義』に同じでないものは、専ら『周易本義』に依拠する⁽⁴⁾。

〔訳注〕

(1) 呂祖謙の著述は、『古周易』一卷のこと。編者である南宋・呂祖謙（東萊、一一三七～一一八二）は、字伯恭、金華の人。南宋の古易の解釈としては、拠り所が確実で、朱子は嘗てこの書の跋文を書き、また自らの『周易本義』を著す際にこの呂祖謙のテキストを用いたとされる。また、南宋・陳振孫『直齋書錄解題』に、呂祖謙に周易について音訓二巻の著述があり、「祖謙門人王莘叟所筆受」と記載する。

(2) 元・董真卿は、字季真、鄱陽の人。その撰述になる『周易会通』十四巻は、程頤（伊川）『易伝』が王弼のテキストを、朱子『周易本義』が呂祖謙のテキストをそれぞれ用い、順序次第、解釈の方針が異なっており、その後の儒者たちもそれらに倣って統一した見解が齎されていないことから、一つの説に執着せずに広く諸家の説を採用し、朱子の採らなかつた学者たちの説をも採用している。

(3) 『周易大全』二十四巻は、明・胡広（一三七〇～一四一八）らが、永楽十二（一四一四）年に勅命を受け、同十三（一四一五）年に完成させた、五経・四書のテキストの一つ。董楷『周易伝義附録』・董真卿『周易会通』・胡一桂『周易本義附録纂疏』・胡炳文『周易本義通釈』の四つの著述に依拠している。このうち董楷・胡一桂・胡炳文は謹嚴実直に朱子の説を守っており、それに対して董真卿は程子・朱子の説を主としながらも広く諸説を採用している。『大全』はそれら四つの著述の説を採りながら、重複を削つ

て一書に纏めている。

(4) 清・顧炎武（一六一三～一六八二）『日知録』は、「洪武初、頒五經天下儒学、而易兼用程・朱、二氏亦各自為書。永樂中修大全、乃取朱子卷次、割裂附之程伝之後、而朱子所定之古文仍復淆乱。」と述べるが、その実、董楷の著述が既に朱子の説を割り付けて程子『易伝』に附していたのである。

〔本文三―尚書〕

一 尚書訓點、從蔡氏集傳。禹貢、集傳無音、大全有音。而其他集傳音、多不與大全音同。然大全音、恐明諸儒所添減、而非盡蔡氏之舊、且間有可疑者。因禹貢一篇、用陸徳明音、其新義則從蔡傳音之。其他篇、則用蔡氏音義、義與古註無異者、則亦用陸氏音以足之。皆標出其上曰陸音者、以別蔡氏也。

〔訳注〕『尚書』の訓點は、蔡沈『書集伝』（一）に従う。「禹貢篇」は、『書集伝』に発音が無く、『書伝大全』（二）に発音がある。そしてその他の篇の『書集伝』の発音も、多くは『書伝大全』の発音と同じでない。とすると、『書伝大全』の発音は、恐らく明の儒者たちが加えたり削つたりしたもので、尽くは蔡氏『書集伝』のままではなく、その上ところどころ疑わしいものがある。そこで「禹貢篇」については、陸徳明『經典釈文』の発音を用い、『經典釈文』に無い新たな意味については蔡氏『書集伝』に従って発音を附す。その他の篇は、蔡氏『書集伝』の発音意味を用い、意味が古註と異なっていない場合は、やはり陸氏『經典釈文』の発音を用いて付け加える。上に「陸音」と掲げてあるものは、蔡氏『書集伝』と区別したのである。

〔訳注〕

(1) 南宋・蔡沈（一一六七～一二三〇）撰『書集伝』六巻のこと。沈は字仲默、号は九峯、建陽の人。朱子がかれに『尚書』の注釈を作ること依頼し、嘉定二（一二〇九）年に完成、淳祐年間（一二四一～五二）に、沈の子杭が朝廷に奉つたとされる。

(2) 『書伝大全』十巻は、明・胡広らが撰した五經大全の一つ。蔡沈の『書集伝』に基づいているが、洪武帝の時に、帝自らが蔡沈の書に間違いのあることを指摘、訂正して天下に頒布した。蔡沈の書に依拠するようになったのは胡広に始まるとされる。

『本文四―毛詩』

一 毛詩訓點、從朱子集傳。余少遊學于京師、聞之字井先生曰、詩釋音叶音、諸本有不同、而唯元許謙詩傳音釋、與詩經大全、此則朱子之舊也。蓋楚辭集註、有釋音有叶音。嘗參考之、與音釋大全無不同矣。余今檢之信然。釋音與陸氏釋文同、叶音則朱子用吳才老補韻。今依先生所校正釋音及叶音、復加訂正。其可疑者、則又參考韻書及世本古義以標出之。

〔翻訳〕『毛詩』の訓點は、朱子『詩集傳』に従う。私は若かった時に京都に遊學し、以下のことを字井默齋先生から聞いた(一)。「毛詩」の解釈した発音・合わせた発音(二)の記述は、諸本で同じではないが、ただ元・許謙『詩伝音釈』(三)と『詩経大全』(四)だけが、朱子のもとの通りである。思うに『楚辭集註』(五)に解釈した発音・合わせた発音を載せる。嘗てこれを比べてみたところ、『詩伝音釈』『詩経大全』と同じでないものは無かった。私が調べてみるとまことにその通りである。解釈した発音は陸徳明『經典釈文』と同じく、合わせた発音について朱子は吳才老『詩補音』(六)を用いている。ここでは默齋先生が校正された解釈した発音・合わせた発音に拠り、また訂正を加えた。疑わしいところには、韻書や『詩経世本古義』(七)を参考として掲げておいた。

〔訳注〕

(一)『訂正五經』の撰者、田邊匡敎は、『宮城縣史』によれば、十四歳の時に七代藩主重村から學費を与えられて京都に遊學し、久米訂齋、字井默齋に學び、のちまた江戸に出て、渋井大至、関松窓、岳太冲らに教えを受けたという。字井默齋は、肥前の人で、名は弘篤、字は信篤。久米訂齋、服部南郭に師事し、官は唐津藩儒をつとめた。致仕後は京都へ出て、弟子の教育につとめた。天明元(一七八一)年、五十七歳で没した。

(二)「叶音」とは協韻とも言う。『詩経』や『楚辭』といった古い韻文で、文字の韻が後世の韻に合わない時に、発音を変えて韻を合わせること、またその変えた発音のことである。

(三)元・許謙(一二七〇～一三三七)の『詩集伝名物鈔』八卷のことと思われる。諸経を研究して古い意味を明らかにしており、その事物の名称・意味の考証は確実な根拠に基づいていて、『詩集伝』の遺漏を補うのに十分である。また陸徳明『經典釈文』及び孔穎達『毛詩正義』から多くを採って

いる。

(四)明・胡広らが撰述した五經大全の一つ。元・劉瑾『詩伝通釈』に基づきながら、冗漫なところを削り、また朱子に従って小序を一篇に纏め、劉書の体裁を変えている。

(五)『楚辭集註』八卷、朱子撰。合わせた音(叶音)が正しいかどうかについては、必ずしもいちいち穿鑿していないと評価される。

(六)南宋・呉棫(字は才老、?～一一五四)『毛詩補韻』のこと。『四庫全書総目』が作られた当時、既に失われていたという。朱子『詩集伝』の合わせた音(叶音)については、初め朱子は呉棫の書に拠っていたのだが、朱子の孫の朱鑑が意を以て改めたために、間違いが多くなったという。

(七)明・何楷『詩経世本古義』二十八卷。時代順に詩を論じていることから「世本古義」と題された。何楷は博學で、さまざまな書物を引用しながら事物の名称、意味を詳しく考証し、また典拠をも明らかにしており、宋以後の儒者の及ぶところでないと言われる。

『本文五―礼記』

一 禮記訓點、從義疏。漢魏注禮者、盧植・鄭玄・王肅・孫炎、為之始焉。而唐・宋・元・明諸儒、各為之說。義疏則集諸儒說、折衷以辨正之、議論可謂精確矣。其音據陸氏舊音、而間發明新義、則別加音讀。因標出義疏中從先儒說及發明新義者一二、以便於讀者。其音義亦唯據陸氏、從其新義、則直用義疏音讀。按玉藻之文、而素帶終辟、至并紐約用組、又大夫大帶、至無箴功、又三寸長齊於帶、至紳鞶結三齊、又肆束及帶、至擁之、鄭注俱謂為亂脫、宜各有所承、然猶存記文之舊、而不之改。此漢儒釋經傳疑之意也。而陳氏澠依鄭注改攢、而無一語明改攢之意。若記文次第本如是者、然義疏非之是也。今謹從舊文次第、而載鄭說以明宜各有所承、他皆倣之。且或不據義疏別擇先儒之說似穩當者而從焉、則掲按字、曰今从之、以表其所取。

〔翻訳〕『礼記』の訓點は、『礼記義疏』(一)に従う。漢・魏の頃の『礼記』に注釈を施した者は、盧植・鄭玄・王肅・孫炎を始めとする(二)。そして唐・宋・元・明の儒者たちが、それぞれ説を唱えている。『礼記義疏』は諸々の儒者たちの説を集め、折衷しつつ判断して正しており、その議論は精確である。その発音が陸徳明の古い発音に拠りながら、時々新たな意味を明らかにし

ている場合には、別に発音意味を附している。そこで『礼記義疏』中の先達の説に従うものと、新たな意味を明らかにしているものがある場合には、一つ二つを掲げ、読者の便に供する。その発音意味はただ陸徳明に拠り、その新たな意味に従っている場合には、ただ『礼記義疏』の発音意味を用いる。考えてみるに、『玉藻篇』の文章の、「而素帶終辟」から「并紐約用組」まで、また「大夫大帶」から「無箴功」まで、また「三寸長齊於帶」から「紳鞶結三齊」まで、また「肆束及帶」から「擁之」までは、鄭玄の注釈ではいずれも乱れて抜けたもので、他の経文に続くのが良いとしながら⁽³⁾、やはり『礼記』の古い文章をもとのまま残し、改めていない。これはつまり、漢代の儒者が經典を解釈する時に、疑わしいものを伝えておくということである。ところが、陳澧⁽⁴⁾は鄭玄の注釈に依拠して改竄し、その上一言も改竄したことを明言していない。もしも『礼記』の文章の順序次第が本来このようであるならば、『礼記義疏』が陳氏を非難するのはもつともである。ここでは慎重に古い文章の順序次第に従い、鄭玄の説を載せてそれぞれ他の経文に続くのが良いだろうことを明らかにし、他の箇所もいずれもこれに従う。その上、『礼記義疏』に拠らずに別に穩当だと思われる先達の説を採んでそれに従う場合は、「按」字を附けて「今之に従う」と言い、採用したところを表わす。

〔訳注〕

(1) 乾隆十三(一七四八)年に成った、欽定の三礼(周礼・儀礼・礼記)義疏の第三部である、『欽定礼記義疏』八十二巻のこと。この三つの礼の注釈はいずれも鄭玄の説に主に基づきながら、さまざまな言説を拾い集めて名称事物を并じ定め、古い礼制の参考とすべき諸家の説があれば広く引用して詳しく考証している。宋の儒者たちの説を多く採り、鄭注の不備を補っているのである。『礼記』については、陳澧『礼記集説』に対して是々非々の立場をとり、他の儒者たちと同列に扱って陳氏の名を最初に掲げていない点で、胡広らの撰した『礼記大全』の誤りを十分に正していると評価される。

(2) 陸徳明『經典釈文』序録に「盧植注礼記二十巻、鄭玄注二十巻、王肅注三十巻、孫炎注二十九巻」とある。

(3) 『礼記』玉藻篇本文「而素帶、終辟、大夫素帶、辟垂、士練帶、率下辟、

居士錦帶、弟子縞帶、并紐約用組」の鄭玄注に「此自「而素帶」、乱脱在是耳、宜承「朱裏終辟」とあり、また「大夫大帶四寸、雜帶、君朱緑、大夫玄華、士緇辟、二寸、再繚四寸、凡帶、有率、無箴功」の鄭注に「此又乱脱在是、宜承「紳鞶結三齊」とあり、また「三寸、長齊于帶、紳長、制士三尺、有士二尺有五寸、子游曰、参分帶下、紳居二焉、紳鞶結三齊」の鄭注に「此又乱脱在是、宜承「約用組」とあり、また「肆束及帶、勤者有事則收之、走則擁之」の鄭注に「此亦乱脱在是、宜承「無箴功」とある。これらの鄭玄注によれば、該当箇所本文は、「天子素帶朱裏、終辟、而素帶、終辟、大夫素帶、辟垂、士練帶、率下辟、居士錦帶、弟子縞帶、并紐約用組、三寸、長齊于帶、紳長、制士三尺、有士二尺有五寸、子游曰、参分帶下、紳居二焉、紳鞶結三齊、大夫大帶四寸、雜帶、君朱緑、大夫玄華、士緇辟、二寸、再繚四寸、凡帶、有率、無箴功、肆束及帶、勤者有事則收之、走則擁之」とするのが正しいことになる。

(4) 元・陳澧(一二六一―一三四一)『雲莊礼記集説』十巻。撰者陳澧は字可大、都昌の人。雲莊はその号である。明の初めに『礼記』のテキストを定める際に、陳澧の注釈を採用し、胡広らが『礼記大全』を撰述する際も、陳澧の注釈に基づいた。これは、南宋以来朱子の学が大いに流行し、陳澧がその系譜に連なる者だったからである。かれの注釈の欠点は、礼の制度に証拠があつてこそ礼の意味が明らかになることを知らず、『孝経』や『論語』に注釈を附けると同様の態度で一文一句を解釈するのに汲々としている点にある。愚昧な者を教えるには十分だが、経術を明らかにするには不十分だという。『欽定礼記義疏』が広く漢・唐の遺文を採用し、先王が經典を制作した趣旨を考証する一方で、陳澧の説を特別視せずに諸家の説と同列に扱ったのは、他の易・詩・書の三つの經典とは異なつた態度だが、明代に比べて格別に優れたことであつたとされる。

〔本文六一春秋〕

一 春秋訓點、從左氏傳。其經文、左氏・公・穀、各有異同。胡氏傳依左氏、然隱五年經、觀魚于棠、左氏觀作矢、六年經、輸平、左氏作渝平、胡氏並從公・穀、大全依胡氏。然隱二年經、履繻、胡氏依左氏作裂繻、莊三十年經、夏師次于成、胡氏亦依左氏無師字、大全並從公・穀、一出一入、無所通從。因今直據

左氏以為經文。然公・穀經止獲麟、而左氏經終孔丘卒、胡傳・大全、並據公・穀。按仲尼春秋之作起獲麟、則文止於所起、先儒已為得其實、今從之。大全反切、多添減陸氏音、而有異同、今悉用陸氏音義。

〔訳注〕『春秋』の訓点は、『左氏伝』に従う。その経文は、『左氏伝』『公羊伝』『穀梁伝』の間で、それぞれ異同が有る。胡安国の解釈①は『左氏伝』に依るが、隠公五年の経「觀魚于棠」について『左氏伝』は「觀」を「矢」に作り、六年の経「輪平」について『左氏伝』は「渝平」に作っているところを②、胡安国はいずれも『公羊伝』『穀梁伝』に従い、『春秋大全』は胡安国のテキストに依っている。しかし、隠公二年の経「履緌」について、胡安国は『左氏伝』に依って「裂緌」に作り、莊公三十年の経「夏師次于成」について、胡安国はやはり『左氏伝』に依って「師」字が無いのだが③、『春秋大全』はいずれも『公羊伝』『穀梁伝』に従っているのは、依拠するところが異なり、一貫性に欠ける。そこでここでは、直接『左氏伝』に拠って経文のテキストとする。ところでまた、『公羊伝』『穀梁伝』は、経文が「獲麟」で終わっているが、『左氏伝』は経文が「孔丘卒」で終わっており④、胡安国のテキスト、『春秋大全』共に『公羊伝』『穀梁伝』に拠っている。考えてみると、孔子が春秋を作ったのは「獲麟」がきっかけとなっているわけ⑤、春秋の経文がそこで終わっているのは、先達が既にその実情を得ていると見なしているわけだから、ここではそれに従う。『春秋大全』⑥の反切は、陸徳明の発音に加えたり削ったりするところが多く、異同が有るので、ここでは全て陸徳明の発音意味を用いる。

〔訳注〕

① 南宋・胡安国（一〇七四～一一三八）撰『春秋伝』三十巻のこと。紹興五（一一三五）年に詔勅が下り、同十（一一四〇）年に完成し、呈上された。宋朝が南へ移って後の著作なので、時事に感じたことを、『春秋』に託して述べたところがあるが、必ずしも經典の趣旨に逐一合っていないという。朱子はこの書について語類で、胡氏の『春秋伝』は、牽強附会したところがあるが、その議論は一定の精神を開陳していると評価する。明の初めに科挙の制度を定めた時、大略元の制度を踏襲し、程子・朱子の学を手本としたのだが、程子の春秋伝は僅か二巻が残るのみ、朱子に至っては専著が無かった。胡安国の学は程子に基づき、張洽（一一六一～一二三七）

『春秋集注』の説は朱子に基づいていたことから、『春秋』についてはこの二人の説を用いるようになった。後に張洽の学は次第に廃れ、胡安国の書だけを用いるようになり、更に經典そのものを読まずに、ただ安国の注釈を主に学ぶようになったとされる。

② 『左氏伝』隠公五年「経五年、春、公矢魚于棠」を、『公羊伝』『穀梁伝』は「五年、春、公觀魚于棠」に作り、また『左氏伝』隠公六年「経六年、春、鄭人來渝平」を、『公羊伝』『穀梁伝』は「六年、春、鄭人來輪平」に作る。

③ 『左氏伝』隠公二年「経二年、九月、紀裂緌來逆女」を、『公羊伝』『穀梁伝』は「二年、九月、紀履緌來逆女」に作り、また『左氏伝』莊公三十年「経三十年、夏、次于成」を、『公羊伝』『穀梁伝』は「三十年、夏、師次于成」に作る。

④ 『左氏伝』末尾、哀公の経文は「経十有六年、夏、四月、己丑、孔丘卒」で終わっているが、『公羊伝』『穀梁伝』は「十有四年、春、西狩獲麟」で終わっている。

⑤ 『史記』孔子世家「魯哀公十四年、春、狩大野。叔孫氏車子鉏商、獲獸以為不祥。仲尼觀之曰、麟也。取之。曰、河不出図、雉不出書、吾已矣夫。顔淵死、孔子曰、天喪予。及西狩見麟、曰、吾道窮矣。……子曰、弗乎、弗乎、君子病沒世而名不稱焉。吾道不行矣、吾何以自見於後世哉。乃因史記作春秋、上至隱公、下訖哀公十四年、十二公。拋魯、親周、故殷、運之三代。約其文辭而指博。……至於為春秋、筆則筆、削則削。子夏之徒、不能贊一辭。弟子受春秋、孔子曰、後世知丘者以春秋、而罪丘者亦春秋。……孔子年七十三、以魯哀公十六年四月己丑卒。」

⑥ 明・胡広らが撰した五經大全の一つ。元の科挙制度では、仁宗・延祐年間（一二一四～一二二〇）から胡安国『春秋伝』を用いていた。汪克寛（一三〇四～一三七二）が『春秋胡伝附録纂疏』を著した時、全面的に安国の書に拠ったのは、こうした当時の定めに従ったのであろう。胡広らが『春秋大全』を撰した時は、克寛の書に基づき、若干改竄をしたところがある。『大全』の採用した諸説は、専ら胡安国の見解に拠って判断しており、その説の是非を考証していない。『経』と題してはいるが、その実胡安国の解釈をそのまま踏襲しているのである。

『本文七―結び』

一 於經文及諸音中、或謬誤可疑者、欲以愚意斷之、則曰按以別之。
文化戊辰十月癸巳

僊臺 田邊匡敕 撰

同藩門人 大河内時壽 謹書

〔翻訳〕經文や諸々の発音の中で、間違いだと思われるものがあり、不肖私が意を以て判断したい場合は、「按ずるに」と言つて区別した。

文化戊辰（文化五年、一八〇八年）十月

仙台藩 田邊匡敕が撰述した（一）

同藩の門人 大河内時壽が謹んで書した

〔訳注〕

（一）田邊匡敕（案斎）は、安永九（一七八〇）年、養賢堂に学頭職が置かれるに伴つて初代学頭に就任し、五経をはじめ四書、『小学』、『近思録』といった養賢堂の教育に関わる書物などを多数撰述した。文化六（一八〇九）年に学頭職を辞任、文政六（一八二三）年に七十歳で没した。なお、『仙台市史』によれば、かれの後を継いで文化七（一八一〇）年に学頭となつた大槻平泉は、大規模な学制改革を行うと共に、昌平坂学問所の林述斎の意見を容れ、素読などに使用する基本的な書物や仙台藩の人々の有用な著述を安価容易に入手できるように、出版事業を推し進めた。文化九（一八二二）年に西村治右衛門が頒行所に指定されたのを皮切りに、伊勢屋半右衛門、伊勢屋安右衛門、菅原屋安兵衛らが次々と「養賢堂蔵版」の出版につとめたのである。

三 おわりに

ここまで『訂正五経』凡例を翻訳し、訳注を施してきたわけだが、最後にその作業の中で気の付いたことをいくつか指摘し、全体の纏めとしたい。

五経のテキストとして、当然のことではあるが、『周易』については『周易本義』、『毛詩』については『詩集伝』という朱子の著作を、また『尚書』については蔡沈『書集伝』という朱子学の系譜に連なる人物の著作に主に依拠している。しかしながら、定本を確定する事情を仔細に見てみると、必ずしも朱子学一辺倒というわけではなく、撰者である田邊匡敕の經典観や学問観がそこに

反映しているように思われる。

まずは、各經典のより古い発音意味をできる限り明らかにしようとする意識を指摘できよう。本文第一段落の「総論」に相当する部分は、陸徳明『經典釋文』の文章をほぼ踏襲して記述されている。そして『礼記』以外の四つの經典については、定本を定めるに当り、やはり『釈文』の発音意味に依拠したり、『釈文』と同じ発音であることを確認したりしている。また『礼記』についても、順序次第に疑いを持ちながらも古い本文をそのままにしておいて妄りに改竄しない鄭玄注の態度に共感を寄せている。数多い諸家の注釈でなく、直接『左氏伝』に依拠する『春秋』の場合も同様であろう。經典のより正確な本来の姿を確定しようとする意図を、ここに見て取ることができる。

また、このこととも関連するのだが、参考となりそうな解釈や説を、できる限り拾つておこうとする態度が窺われる。『周易』については、程子・朱子の説を主としながら広く諸説を採用している董真卿の書を参照し、『毛詩』については、宇井黙齋の校正に拠りながらも、疑わしい箇所には韻書や『世本古義』を参考に掲げている。『礼記』についても、諸家の説を広く集めて詳しく考証している『欽定礼記義疏』に主に基つき、しかも穩当な先達の説を「按」字を附して掲げている。更に第七段落の結びにあるように、疑わしい箇所について意を以て判断した場合に、やはり「按」字を附して述べておくというのである。經典の本来の姿を確定するに際して判断材料となりそうなものを広く提示して考証の根拠を明らかにするのは勿論なのだが、読者が自ら諸説を勘案しつつ主体的に読解に取り組んでいくようにとの配慮があつたと見なせるのではないかとまれ、こうした『訂正五経』の性格を明らかにするためには、当時の仙台藩の儒学を中心とした学問の状況や、他藩で出版された儒教經典のテキストとの比較検討が不可欠であるし、また本寺地区で当該書がどのような役割を担いどのような人々に受け入れられたか、調査すべき問題はなお多々あるわけだが、それらについてはまた稿を改めて考えてみたい。

（国際文化学科准教授）

〔附記〕本稿は、平成十八年度に岩手県立大学から研究費の措置を受けて行なわれた、盛岡短期大学部プロジェクト・文化の継承グループの研究成果の一部である。

An Annotated Translation of Explanatory Notes of “Teisei-Gokyo” edited by Yoken-Do at Sendai-Han

Junichi TAKANO

“Sato-ke-Monjo” are very important materials for the study of history and culture of the Hondera region of Ichinoseki City. Now Ichinoseki City Museum is preserving it, including “Teisei-Gokyo” edited by Yoken-Do at Sendai-Han. In this paper, I translate and annotate this text’s explanatory notes. Through this work, I would like to get a fundamental view of the characteristic state of knowledge at Sendai-Han and the culture of Hondera region.

Keywords: *Teisei-Gokyo, Yoken-Do, Sato-ke-Monjo*
訂正五經、養賢堂、佐藤家文書